

## —JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School に掲載した Original 論文の英文 Abstract を、著者自身が和文 Summary として簡潔にまとめたものです。

## Journal of Nippon Medical School

Vol. 86, No. 1 (2019 年 1 月発行) 掲載

**Immunohistochemical Study of Non-Epithelial Cells in Spiradenoma**

(J Nippon Med Sch 2019; 86: 15-21)

**らせん腺腫における非上皮性細胞の免疫組織化学的検討**

伊東慶悟<sup>12</sup> 安齋眞一<sup>1</sup> 佐伯秀久<sup>3</sup>

<sup>1</sup>日本医科大学武蔵小杉病院皮膚科および皮膚病理診断室

<sup>2</sup>東京慈恵会医科大学皮膚科学講座

<sup>3</sup>日本医科大学皮膚科学

**背景:** 腫瘍内のリンパ球浸潤は、らせん腺腫の特徴とされているが、その表現型に関しては、少数の報告しか無い。また、らせん腺腫には多くの S-100 蛋白陽性細胞が含まれているが、その細胞は筋上皮分化細胞という意見と Lagerhans 細胞であるという意見があり、いまだに議論があるところである。

**方法:** 上記の疑問点に関して、10 例のらせん腺腫を用いて、臨床病理学および免疫組織化学的検討を行った。

**結果:** 使用した症例は男性 7 例、女性 3 例であった。病理組織学的検討では、らせん腺腫は 2 つの亜型に分類された。1 つは、5 例の血管増殖 (VP) 型であり、それらは、間質の浮腫、血管増殖、炎症細胞浸潤をともなっていた。もう 1 つも 5 例で、上記の様な所見を欠き、通常型と名付けた。免疫組織化学染色では、多数の S-100 蛋白陽性細胞がみられた。その陽性細胞は大型の淡染する核を持つ細胞、樹枝状突起を持つ細胞、そして、 $\alpha$ -smooth muscle actin 陽性の小型の濃染する核を持つ細胞が含まれていた。腫瘍実質に浸潤しているリンパ球は、ほとんど CD3+ であった。CD4 および CD8 陽性細胞の比較では、ほぼ同数の場合と CD8 陽性細胞の方が多い場合があった。CD20 陽性細胞の浸潤は 5 例でみられ、疼痛を伴った例では、腫瘍近傍に多数の神経線維がみられた。

**結論:** らせん腺腫の腫瘍実質では、CD3 陽性細胞が浸潤しており、CD8 陽性細胞の方が CD4 陽性細胞より優位であることが多かった。CD20 陽性細胞は特に VP 型の腫

瘍実質と間質に巣状にみられることがあった。らせん腺腫の S-100 蛋白陽性細胞は、Langerhans 細胞のみでなく筋上皮分化細胞も含まれている。

**Diagnosis of Bone Metastasis in Patients Without a History of Cancer**

(J Nippon Med Sch 2019; 86: 22-26)

**がんの既往のない患者における骨転移の診断**

北川泰之 伊藤寿彦 水野祥寛 須藤悦宏

金 竜 角田 隆 高井信朗

日本医科大学整形外科

**目的:** がんの既往のない患者の骨転移の早期診断は困難である。しかし、がんの既往のない患者における骨転移の困難さに関する研究はほとんどみられない。本研究では、そのような骨転移の診断が、既往のある患者よりも困難であるか否かということについて自験例を使って後方視的に検討した。

**方法:** 2011 年から 2014 年において当科にて診療を行った骨転移患者の検討により、初診時の診断 (当該疾患による症状が理由で初めて訪れた医療機関)、発症から初診時までの期間、初診から骨転移の診断までの期間、骨転移診断時の重症骨関連事象の有無について、悪性腫瘍の既往のない患者群 (A 群, 27 例) と既往のある群 (B 群, 54 例) の比較を行った。

**結果:** A 群は B 群に比較して、初診時の診断率は有意に低く (11.5% と 52.4%,  $p=0.00069$ )、初診から骨転移の診断までの期間は有意に長く (中央値 7 週と 3 週,  $p=0.018$ )、骨転移診断時の重症骨関連事象の頻度は有意に多かった (81.4% と 50.0%,  $p=0.05$ )。

**結論:** 悪性腫瘍の既往のない患者の骨転移の診断はきわめて困難である。われわれは、骨転移の早期診断のためにこの事実を常に留意し注意深い診察によって重症骨関連事象の発生を抑制しなければならない。

**The Effect of a Frequency-Doubled Q-Switched Nd:YAG Laser on Hairless Mice Harboring Eumelanin and Pheomelanin in the Epidermis**  
(J Nippon Med Sch 2019; 86: 27-31)

表皮にユーメラニン、フェオメラニンを有するヘアレスマウス皮膚へのQスイッチNd:YAGレーザー(532nm)の作用

山口華央 船坂陽子 佐伯秀久  
日本医科大学皮膚科学

**背景:** レーザー治療において、濃い皮膚色に対して照射する場合、注意深く照射することが必要なことが知られている。しかしながら皮膚におけるメラニン含量やメラニンの種類の正確な役割、ならびにレーザーのこれらメラニン種に対する温熱効果については、*in vivo*での検討は十分に行われてこなかった。

**方法:** われわれはユーメラニン、フェオメラニン、あるいはメラニンを産生しないメラノサイトを表皮に保持するマウスを作成した。これらのマウスを用いてQスイッチNd:YAGレーザー(532nm)の作用について検討した。

**結果:** ユメラニンを持つマウス表皮は、フェオメラニンを持つマウス表皮と比較して、より低いフルエンスにて熱変性を示した。一方メラニンを有さないマウス皮膚では表皮の熱変性はみられなかった。

**結論:** QスイッチNd:YAGレーザー(532nm)はメラニンに吸収されることにより細胞の熱変性を誘導すること、そして異なるメラニン種を含有する細胞に対して、QスイッチNd:YAGレーザー(532nm)の効果が異なることを*in vivo*の照射システムにおいて明らかにした。

**A 10-Year History of Anti-Smoking Campaigns and Enlightenment Activities for Chronic Obstructive Pulmonary Disease for Citizens at the Plaza in Ebina City**  
(J Nippon Med Sch 2019; 86: 32-37)

神奈川県海老名市において10年間実施した慢性閉塞性肺疾患(COPD)啓蒙活動と有病率・認知度に関する調査

佐藤陽三<sup>1,2</sup> 谷内七三子<sup>1,2</sup> 鍋木翔太<sup>1,2</sup> 有賀直広<sup>1</sup>  
久保田馨<sup>2</sup> 清家正博<sup>2</sup> 山野義光<sup>1,2</sup> 弦間昭彦<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>海老名総合病院呼吸器科

<sup>2</sup>日本医科大学大学院医学研究科呼吸器内科学分野

**目的:** 慢性閉塞性肺疾患(chronic obstructive pulmonary disease: COPD)の有病率は日本において8.6%、世界的に10%程度と報告されている。しかしながら多くのCOPD患者が未診断の状態が存在し、COPDについての正しい知識が普及していない現状がある。本研究は、咳・たん・息切れなどの症状があるにもかかわらず未診断の状態にあるCOPD患者の存在を明らかにするとともに、地域における10年間の啓蒙活動を通じCOPD認知率を向上させることを目的とした。

**方法:** 2006年から2015年の10年間、海老名市内の広場において街頭の通行人より参加者を募り、スライドやパンフレットを用いた講演、肺機能検査、自覚症状やCOPD認知に関するアンケートを行った。

**結果:** 40歳以上の参加者1,206名のうち、閉塞性換気障害(FEV1%<0.70)を認めCOPDが疑われる参加者は全体の5.6%であった。彼らの大部分はCOPD未診断の状態にあり、その半数は症状があるにも関わらず医療機関を受診していないことが判明した。1,055名に実施したCOPD認知度に関するアンケートでは、COPDを「知らない」と答えた参加者が全体の65%を占めた。

**結論:** 症状がありCOPDが疑われるにもかかわらず病気に気づいていない市民が多く存在することが証明された。COPD有病率および死亡率改善のために、知識の普及と認知率を向上させることがわれわれ臨床医の使命であることが示された。